

「神は欺けない」

詩編34編9～10節

34:9 味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。
34:10 主の聖なる人々よ、主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない。

使徒言行録5章1～11節

5:1 ところが、アナニアという男は、妻のサフィラと相談して土地を売り、

5:2

妻も承知のうえで、代金をごまかし、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

5:3

すると、ペトロは言った。「アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。

5:4

売らないでおけば、あなたのものだったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになったのではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」

5:5

この言葉を聞くと、アナニアは倒れて息が絶えた。そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。

5:6 若者たちが立ち上がって死体を包み、運び出して葬った。

5:7 それから三時間ほどたって、アナニアの妻がこの出来事を知らずに入って来た。

5:8

ペトロは彼女に話しかけた。「あなたたちは、あの土地をこれこれの値段で売ったのか。言いなさい。」彼女は、「はい、その値段です」と言った。

5:9

ペトロは言った。「二人で示し合わせて、主の霊を試すとは、何としたことか。見なさい。あなたの夫を葬りに行った人たちが、もう入り口まで来ている。今度はあなたを担ぎ出すだろう。」

5:10

すると、彼女はたちまちペトロの足もとに倒れ、息が絶えた。青年たちは入って来て、彼女の死んでいるのを見ると、運び出し、夫のそばに葬った。

5:11 教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた。

教会には色々な電話がかかってくる。教会員の方からの用事の電話、初めて教会に来られる方からの礼拝の問い合わせの電話、分区や教区の先生方や教会からの電話、そして悩みごとの相談の電話もあります。嬉しい電話もあれば悲しい電話もあります。その電話の一本一本に丁寧な対応をすることはとても大切なことだと思います。

ただ、皆様のご自宅にもかかってくると思いますが、教会にもかかってくる電話があります。それが「詐欺」の電話です。最近はないのですが、2か月ほど前でしょうかね、若い男性の声で「〇〇会社の〇〇と申しますが、近いうちにそちらのインターネットが使えなくなるので一軒一軒説明に伺っています。今だと〇〇日にお伺いできますがどうでしょうか」たしかそのような内容の電話だったと思います。私はとっさに「これは詐欺の電話だ」と確信して対応をしました。

はたして詐欺の電話をかけてきた人は自分が電話をした先が教会だとわかって掛けているのか、だとしたらよっぽど肝の据わった人だなと思います。同じようにお寺や神社にもか

けているのか疑問に思いました。社会的に問題になって久しい詐欺の電話はいつどこに掛かって来てもおかしくありません。私たちは常日頃から気をつけないとまんまと詐欺に引っかかって大切なものを失う恐れがあるのです。

「詐欺」を国語辞典で調べてみますと、「他人をだまして金や品物をとったり、損害を与えたりすること」という意味です。そして詐欺の漢字を見るとゴンベンに作るの「詐」という字と、其と欠けるの「欺」という字からできています。面白いのですがこの「詐」も「欺」も同じ意味であざむくという意味の字なのです。あざむくという同じ意味を持つ字を合わせて「詐欺」なのです。その「あざむく」という言葉は「上手なうそを言って、聞く相手に本当だと思わせる」という意味があります。ですから「インターネットが使いなくなりますよ」とか「税金の還付金がありますよ」と上手なうそをついて、聞いている私たちは相手が言っていることが本当だと思ってしまったらまんまと詐欺に引っかかってしまうわけなのです。

この「上手なうそを言って、聞く相手に本当だと思わせる」ことをしたのが今日の聖書箇所に出てくるアナニアとサフィラという一組の夫婦なのです。

先週、先々週と他の聖書箇所から御言葉を聞いていましたが、今私たちはペンテコステに誕生した最初の教会の姿を通して神様から恵みを頂いています。最初の教会は困難な出来事に対して心を一つにして祈り、互いに助け合い支え合い、愛し合って、土地や財産を持っている人はそれを売って教会に献金してそれを皆で分かち合い教会には一人も貧しい人がいないというどこか理想的な教会の姿でした。そのようにささげる人の代表として後に使徒パウロと伝道旅行に出かけることになるバルナバという人がいました。バルナバのささげる行為が後の教会に語り継がれるほど称賛されたのでしょう。「バルナバさんはすごい、すばらしい」多くの人がバルナバを称賛していました。

そうするとそのことが面白くないと思う人が出てきます。バルナバばかりちやほやされることに対して、私たちも称賛されたいちやほやされたいと思う人がやはり出てくるのです。アナニアとサフィラの夫婦はそういった思いに支配されてしまったのです。

アナニアとサフィラの夫婦が取った行動が1節2節に記されています。

「5:1 ところが、アナニアという男は、妻のサフィラと相談して土地を売り、

5:2

妻も承知のうえで、代金をごまかし、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置いた。」

アナニアとサフィラは土地を売った代金をごまかしてその一部を献金しました。彼らのとった行動の何が問題かといいますと、バルナバのように土地を売った代金の全部をささげないで一部しかささげなかったことが問題ではありません。問題はごまかして一部しかささげなかったことなのです。この「ごまかす」という言葉はもとの言葉では「わきへのける」とか「別にする」という意味があります。つまりアナニアとサフィラは土地を売って手に入れた代金をまず自分たちのために別にしたのです。まずなによりも自分たちの生活が大事だとまず自分たちの分を別にしたのです。そしてその残りを献金したのです。それは、仮に土地が100万円で売れたとしたら、まず90万円を自分たちの生活のために別にしておいて、残りの10万円を献金したのです。神様よりもまず自分たちの生活を優先させたのです。でも、それでペトロから指摘されて息が絶えるほどの悪いことをしているとされるのであれば、私たちは怖くて献金ができなくなってしまいます。私たちはやはり自分たちの生活が大切ですから自分たちの生活のために別にすることがそれほど悪いことなのかと思

います。

ペトロはアナニアに対してこのように指摘しました。

「アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」（3・4節）

アナニアは聖霊を欺き、人間を欺いたのではなくて神を欺いたのです。「欺く」という言葉には「上手なうそを言って、聞く相手に本当だと思わせる」という意味だと言いました。アナニアは上手なうそを言って聖霊をさらには神様に本当だと思わせようとしたのです。それは具体的には、1000万円で売れた土地でその一部である100万円をささげたのですが、アナニアとサフィラの夫婦は「1000万円で売れた土地の一部の100万円です。神様の御用のために用いて下さい」と献金したら良かったのですが、彼らは「私たちの土地は100万円で売れました。これが全てです。私たちが全てをささげるささげものを神様の御用のために用いて下さい」とさも100万円で売れたのが本当だと思わせるように二人で示し合わせたのです。ささげる金額は100万円に変わらないのですが、これが一部ですと正直に言えば良かったのですが、これが全てですとうそをついてそれが本当であるかのようにふるまったのです。彼らは聞いたペトロたちや教会の人たちを、さらに何よりも聖霊をそして神様を欺いたのです。ペトロはそのようなアナニアとサフィラのうそに騙されることなく、うそを見抜き指摘をしたところアナニアもサフィラも倒れて息が絶えたのです。

それにしても何ともぶっそうな話です。神への欺きを指摘された夫婦が息絶えた。しかもそれが教会内で起こったことというのがなんとも恐ろしい出来事です。出来事そのものは教会に詐欺の電話をかけてきた人に、私が「教会に詐欺をするのは神様に詐欺をするのと同じですよ」と指摘したら電話の向うで息絶えたというのと同じようなものですから。教会に詐欺の電話をしてくる人たちは誰でもいいから騙されてお金が欲しいという単なるお金目的の動機ですが、アナニアとサフィラの動機はもっと根が深い問題です。

バルナバが羨ましい。ちやほやされて羨ましい。私たちもバルナバのようにちやほやされたい。でもそれには土地を売った金額の全部をささげるのはもったいない。じゃあ、一部しかささげないけどそれを全部と偽ってささげてもペトロたちにも神様にもバレないだろう。誰にもバレずにお金は手に入るしみんなの称賛も手に入れることができる、一石二鳥だ。実に簡単に楽しんで痛みを伴わずにバルナバのようになれる。

そこにあるのは自己顕示欲、自分たちがよく見られたい、自分を大きく見せたい「アナニアさんとサフィラさん夫妻はバルナバさんのように素晴らしいね」と褒められたいという欲望です。

本来なら神様の御用のために、教会の貧しい人々の暮らしのためにと喜んでまた謙遜な心でささげる献金であるはずなのですが、その献金を利用して自分たちがさも立派な信心深い信徒でありこれが本当の姿のように装ったのです。そこには神様への畏れは見られません。神様を畏れることなく、神様を利用して自分たちを良く見せようとする人間の弱い姿の現われです。それは神様への欺きであると同時に、自分自身を欺いたのです。

私たちはアナニアとサフィラ夫婦の姿を見て、「なんてひどいやつだ」と簡単に批判できる

でしょうか。私はできないと思います。それは彼らの心の中にあるもの、自分に嘘をついて、神様に嘘をついて、神様を欺いてでも自分を良く見せたい、自分を大きく見せたいという思いは私たちの誰もが持っている普遍的な思いであり、私たちの弱さと言えるでしょうし、それを罪と言い換えても良いのでしょうか。アナニアとサフィラの姿は私たちの姿なのです。立派な人が羨ましくて妬ましくて、神様よりも自分を優先して、神様のためと言いながら結局は自分を大きくまた立派に見せたいがために自分を欺き、神様を欺く、そこに私たちの罪の姿があるのです。

11節に「教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた。」とありますように、教会は私たち人間がそのような弱い罪人であることを絶えず自覚すると共に神様を畏れることの大切さを知るところです。神様を畏れるということは、神様を欺くことは決してできないことを知ることです。どんなに私たちが立派で正しい人間であるかのように見せかけても、自分を欺き神を欺いても、神様は決して欺けないのです。神様を欺けないからこそ、神様は大切な御子イエス・キリストを弱く小さな罪深い私たちの罪の贖いのために十字架につけ私たちに大きな愛を与えて下さったのです。

教会はそのような神様の大きな愛を、味わい見るのです。「味わい、見よ、主の恵み深さを」（詩34：9）とありますように、教会は皆で共に味わうのです。分かち合うのです。共に神様を礼拝し、イエス様の十字架と復活の愛と恵みに感謝をして歩んでいきましょう。